

県オリジナル品種ランキュラス 「てまりシリーズ」の普及・拡大に向けて

■ 中讃管内ランキュラス生産者 ■

（中讃農業改良普及センター 黒川幸重、森田知子、○浜田佳代子）

●対象の概要

中讃地域の花き生産は、キクやカーネーション、鉢花などの施設栽培が中心である。管内の花き栽培面積は、消費の減少や輸入増加による販売単価の停滞や生産コストの上昇、生産者の高齢化等により伸び悩んでいる。

生産者の経営安定や規模拡大を促進するためには、燃料費等の生産コストの削減を図るとともに、県オリジナル品種など実需者ニーズの高い新たな切花・鉢花の導入を促進する必要がある。

●課題を取り上げた理由

ランキュラスは収益性が高く、比較的生育適温が低いことから、冬季の有望品目として注目されている。県内では、東讃、西讃地域を中心に栽培されており、他品目からの転換や冬季の補完品目として導入されている。

中讃地域においても、燃油価格の高騰により冬季の栽培を休止する生産者もいることから、転換品目としてランキュラスが有望であると考えて、導入促進に取り組んだ。また、キクや草花等からランキュラスに転換した生産者は、先行している産地と比較して栽培技術レベルの差が大きく、品質や収量に差異が生じていた。

そのため、栽培技術の高位平準化および安定生産を図るとともに、生産拡大に向けて、新規栽培者の確保や販売促進（PR活動）に関係機関と連携して取り組むこととした。

●普及活動の経過

1 新規栽培者の掘り起こし・支援

中讃地域における県オリジナル品種「てまりシリーズ」の栽培は、平成26年に2戸の生産者で始まった。その後、関係機関と連携して新規栽培者の獲得に向けた推進資料を作成し、花き生産者への個別推進を行った。全ての生産者が栽培を開始してから3年未満と栽培経験が浅いことから、個別指導に加えて、定期的に講習会や合同巡回などを開催して、生産技術習得の支援体制を整えた。



現地ほ場巡回の様子

2 生産技術の高位平準化

(1) 株枯病の防除対策

ランキュラスの品質と収量に影響を及ぼす原因のひとつに、ランキュラス株枯病がある。

当病害は、感染すると地際が黒変し株全体が枯れる。従来知見によると、株枯病は10月の定植後40～50日頃から発生することが明らかになっている。管内では上記の時期だけでなく、3月頃の発生も確認されている。そこで、病害虫防除所と連携し、株枯病の防除対策に向けた現地試験を行った。

(2) 球根ロスの減少に向けた対策

株枯病対策とともに、球根の自家増殖の過程で発生する腐敗等の球根ロスを軽減することも安定生産のためには重要であることから、球根ロス発生抑制を目的とした実証ほを設けて、対策を検討した。

3 販売促進（PR活動）

ランキュラスは全国的に生産量が増加している品目であるが、認知度は比較的低い。また、中讃地域はランキュラスの後発産地であることから、県内の他産地に比べて単価も安いため、知名度・単価向上を狙ったPRが必要と考えた。

そこで、スポーツイベントへの花材提供を始め、商談会や産直販売での紹介用POPの設置等を通して、知名度や単価向上に向けた活動を行った。

●普及活動の成果

1 新規栽培者の掘り起こし・支援

JA担当者と連携し、JA綾歌南部花卉部会の総会などを通じて、「てまりシリーズ」の紹介や、栽培の概要及び市場動向について説明するなどの取組みを行った結果、栽培面積は7.5aとなり、生産者数は2戸から5戸へと増加した。(図-1)

また、生産技術の早期習得に向け、農業試験場の研究員や専門普及指導員、JA担当者と連携して巡回指導を行った。巡回指導を通して、各生産者の栽培体系や栽培方法に応じた効果的な指導を行う体制を整えることができた。

また、生産者が他の生産者の栽培ほ場を見て回る機会を設けることで、生産者間の情報共有や意識向上が図られた。

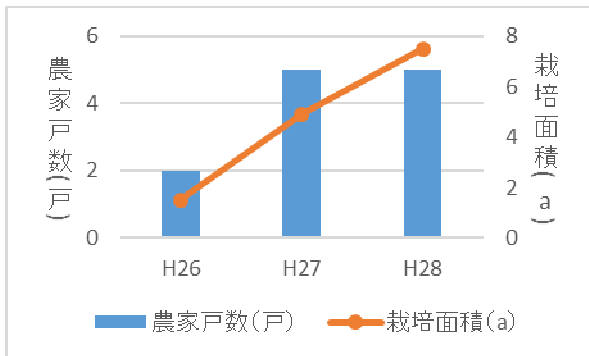


図-1 ラナンキュラス農家戸数、栽培面積の推移

2 生産技術の高位平準化

(1) 株枯病の防除対策

現在は、初期の防除対策として定植前に球根の薬剤浸漬を行っている。今回の試験では、より防除効果を高めるため、定植前の薬剤浸漬に加えて、掘り上げ・洗浄後(乾燥前)にも同様に薬剤浸漬を行い、株枯病発病率について調査した。なお、使用球根は前年の株枯病発病ほ場から掘り上げたものを使用した。

その結果、掘り上げ・洗浄後の薬剤浸漬の有無による発病の差は認められなかった。しかしながら、定植前の薬剤浸漬を行わなかった区では、早期から発病が見られ、定植前の薬剤浸漬の重要性が再確認された。

(2) 球根ロスの減少に向けた対策

自家増殖した球根を最大利用するため、定植球の重さの違いによる品質への影響に関する実証ほを設置した。その結果、従来廃棄していた小球(2g~4g)の1球植えでも、大球(4g以上)と変

わりない切り本数を確保できることが分かった。

また、冷蔵処理時の腐敗球の発生抑制については、球根掘り上げ時の洗浄、乾燥、球根貯蔵方法の違いにより球根腐敗率が減少することが分かった。これらの作業を改善することにより、次年産の球根ロスの軽減が期待できる。

3 販売促進 (PR活動)

地元丸亀市で開催されている「香川丸亀国際ハーフマラソン」において、平成27年度より会場内の飾花等に管内で生産された「てまりシリーズ」を使用した。今年度は、小学生駅伝の優勝者に手渡すビクトリーブーケも「てまりシリーズ」を用いて作成した。こうした取り組みは新聞にも掲載され、幅広い周知につながった。

また、全国の市場関係者や卸売業者が集まる「四国の花トレードフェア(商談会)」や、地元の産直において、「てまりシリーズ」の紹介用POPを設置し、単価・知名度向上に努めた。



丸亀ハーフマラソンにおける会場内飾花および紹介用POPの設置

●今後の普及活動の課題

これまでの取組みの結果、栽培面積や農家戸数は増加傾向にあり、今後も継続して新規栽培者の掘り起こしに努めることにより、面積の増加は十分に見込める。

しかし、催芽技術の向上を始め、改善すべき技術課題も多い。また、規模拡大のネックとなる収穫作業軽減対策など、労働環境の改善も必要である。このことから、今後も関係機関と連携し、生産者支援を強化していくことが必要である。